

## 『詩集 日の変幻』

2020年11月30日

宮崎県延岡市で、教会の牧師をしていた時、詩人を目指していた本多寿氏と出会った。離任後、しばらく音信はなかったが、彼が、詩の芥川賞と言われる「H氏賞」を受賞した時から、交わりが復活し、詩集を出す度に、贈ってくれるようになった。昨年出した『風の巢』は日本詩人クラブ賞を受賞している。彼はキリスト者ではないが、聖書をよく読み、『信徒の友』にも、詩集が紹介されていた。今年の12月に出版される『詩集 日の変幻』を贈ってくれた。コロナ禍の今、メメント・モリ（死を忘れず）、死のウイルスが愛のウイルスに変化することを願いつつ生きると書いていた。自然への愛と人間の営みをいつくしむ思いを歌った詩を一篇、紹介したい。全ては移ろい、変幻するが、その中に実在する「いのち」を見つめ、愛することが生きることではないかというメッセージとして受け止めた。

### 日の変幻 28

かぎりある「いのち」をいつくしむ  
蟻やトンボの「いのち」を  
草木や花の「いのち」を  
わたしとあなたの「いのち」を  
おなじようにいつくしむ／  
いのちあるものに  
いつか、かならずやってくる  
死をいつくしむ  
もちろん死の「かなしみ」もいつくしむ／  
愛の「かなしみ」を  
「さびしさ」を  
また「孤独」さえ  
光と影をいつくしむように  
いつくしむ／  
そよ風の「なぐさめ」を  
あたたかな土の「やすらぎ」を  
燃える火の「はげしさ」をいつくしむ  
星の「またたき」を  
月の「しずけさ」をいつくしむ／  
うつろう日の「すぎゆき」を  
季節の「めぐり」をいつくしむ  
旱（ひでり）の「かわき」も  
雨つづきの「憂鬱」も  
雷神と海神の「いかり」もいつくしむ／  
あなたとわたしの「悔い」を  
「嘆き」を「痛み」を  
すべて、まるごといつくしみ  
きょう、いま、ここ、このときを  
一本の木として立ちつづける